

『モノトーンな時代』

山口 恭弘

秋——。と雖も日中はまるで真夏の暑さだ。疾うに辟易して居る。筆は一向に走らずただ机に対座するが直ぐに離れて仕舞う。

気が滅入る事も度々浮んで来る。それ等が集中出来てない要因の一つでもあるか。例年の今頃なら残暑御見舞いを書いたり、暑氣払いと称して飲み会を仕掛けたりして居たが今年はその気になれない。全く、非日常的な夾雑物に押し潰された様な状態が続いて居る。それは左奥歯二本の治療に五月半ばかり延々と三十一回通院する羽目になってしまったことに尽きる。何とか十月中には終了となつて欲しいものである。

残念なことがあつた。暑い最中に喪服を二度も着用、予期せぬことが余りにも多い。

「ちゃん付で、呼びあう友が黄泉の旅」

鳴々、もう一度話をして置きたかつた。意に満たな

いことは月日が過ぎ往く様を愛でる中に解消される、と信じざるを得ない。少しでも元氣のある時に書いた作品を紹介して今回は早く切り上げたい気持ちになつてしまった。ご笑覧下されば幸いです。

一九九六年『春夏秋冬』第2号夏の号より

「或る手紙」

朝の公園にこれ程良い雰囲気があるとは今迄気が付かなかつたことです。久しぶりに午前中から東京へ出て日比谷公園のベンチにて一筆、久しく便りのない中に冬に入つてしまいました。

何も目立って変わったこともないので今のこの様な時に不思議かも知れないが遠くの人のことが思い出されたのです。自分のまわりの忙しさに追われ、ついぞ味わつた事のないゆとり、こんな気分ですっかり今日の今十時半頃なのですが潰かっています。サボルと言う良さを絶えて久しく感じられ、それに何とも言えない幸福感を両手に花だなんて

言ったら少々おかしな頭じゃないのと思われちゃうかな。

さて、枯葉も残り僅か観光のポスターは盛んにスキー、スケートを宣伝しています。冬がやはり近づいたのだなあーと、やがて何処かへ行きたくてたまらなくなる自分を色々と感じます。

先日、今年の二月に蓼の海へ行った連中（覚えていたでしょうか？）と会って又行きたいなんて話もありました。貴女達が一年振りに逢ってもいいなあと話がまとまれば幸いです。再びあの湖の所で楽しく過ごせる気がします。この様に書いていると、この日比谷公園という所とても愛着を感じて来ます。そしていろんな人が、あっちこっち思い思いに午前中を楽しんでいる。鳩がだいぶ居て芝生の上を気ままに何かを探して歩いていきます。

では僕もそろそろ歩きたくなりました。

いずれよき返事をお待ちしています。

（了）